

島半鮮

特217

72

著次一上井將中軍陸



始



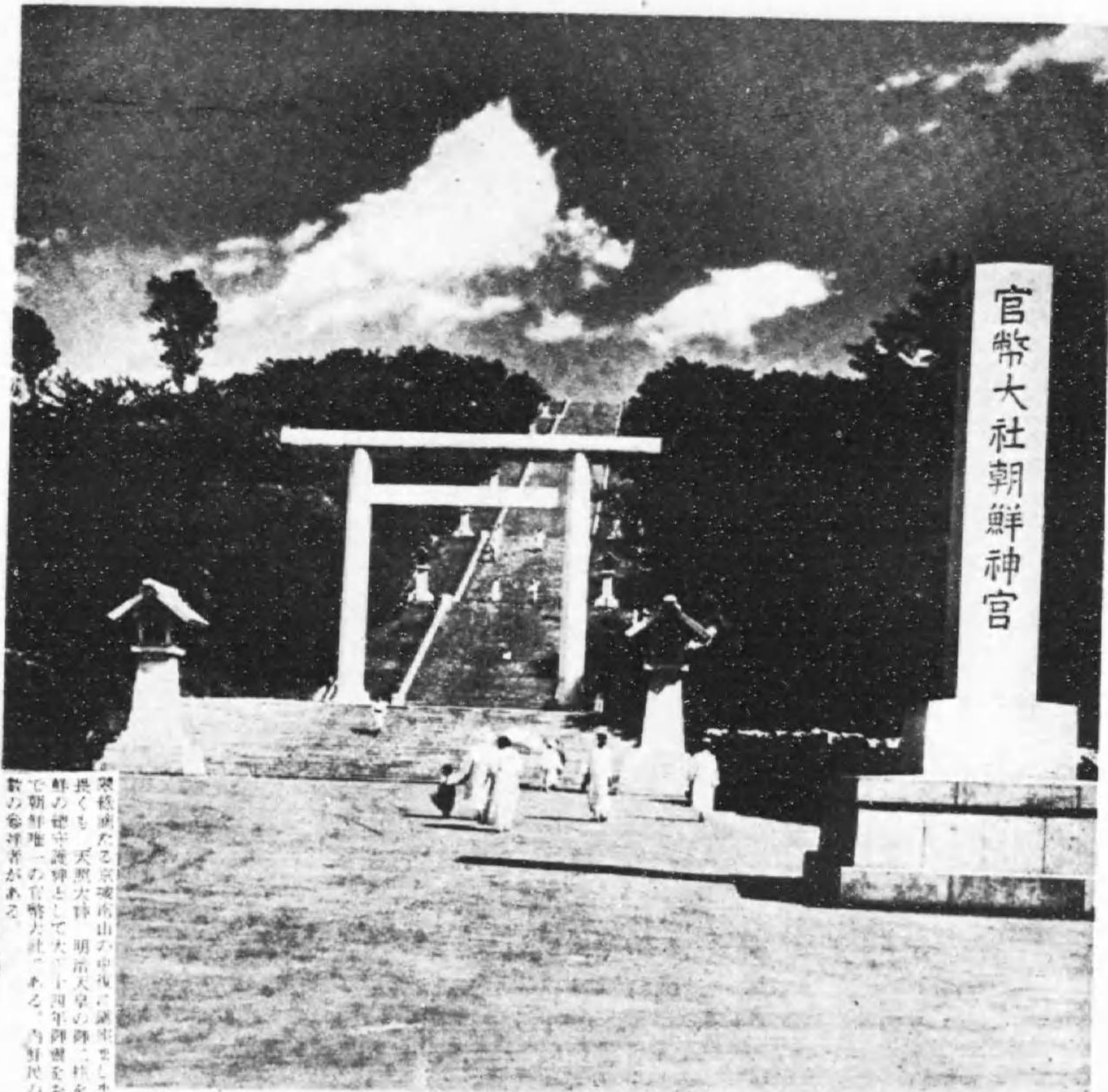
特217
72



一次著

半島





朝鮮神宮は、
 長くも、天照大神、明神天皇の御孫を祀り奉り、我朝
 神の御宇神代として大正十四年神代を以て奉つた神代
 正朝神代一の官幣大社である。当神代は、神代に於ては、
 神の御宇神代である。

朝鮮神宮



朝鮮神宮
 大正十四年
 十月
 廿日



推薦の辭

井上中將閣下は帝國軍人として己に赫々たる武勳を樹て 退いては日本興國同盟を起し日本精神の昂揚に努め、各地に巡講して蹇々匪躬の誠を效しつゝあるは余の常に敬服措かさる所、朝鮮に對しても深き理解と達見を有せらるゝことは時々拜應する次第にて、此著は平素の蘊蓄の一端を述べたるを疑はず、未だ精讀の暇なきも朝鮮同胞、特に青年の指針として極めて適切なるものたるを信するものなり、敢て推薦の辭と爲す。

昭和十六年八月

貴族院議員 關屋貞三郎

自序の稿

自序

高麗焼や人蔘が、朝鮮を代表してゐた時代もあつたが、東亞に於ける衝
争が劇しくなつてからは、朝鮮半島の地位が漸次向上して來た。ことに我
が國が大陸に躍進するやうになつた現代は、ひとり我が國の連絡線たるば
かりでなく、大陸北邊への前進根據地として、軍事並に經濟上一層その地位
を有力ならしむることゝなつた。こゝに於てか、我が國と朝鮮半島とは、
きわめて密接なる關係を有するとともに、兩者は文字通り一體でなければ
ならぬ。しかるに我が國においては、今なほ、日鮮融和なる語を聞くが、
もはやその時期ではない。

かくのごとく、日鮮一體が要求される今日、朝鮮なる語原が『東表の日出國』を意味することさへ理解せぬものが多い。内地人の中にも、『朝鮮人』なる言葉を避け、『半島人』と呼ぶことを、かへつて丁寧な稱呼であると考えられてゐるものもあり、朝鮮人の中にすら、みづから『半島人』なる稱呼を用ひ得々たるものもある。これをもつて見るも、朝鮮がいかに理解せられてゐないかが判る。

また、ある論者は、朝鮮人の經濟的地位を向上しさへすれば、精神的感化が伴ふて來ると説くものがあり、また、氏名、言語、衣服等を一致せしむれば、自然に協同心を發揮するやうになると説くものもある。いづれも、適當なる手段方法で、もあるであらう。しかし、心からなる一致協力は、自己の精神的發動を第一とする。かゝる見地よりすれば、まず過去三千年

來の歴史より検討を行ひ、一致協力の必要を充分に知得し、さらに現在の狀勢に照し、ます／＼その必要を確認するに於て、始めて一體となること
が出来るのである。

予、日露戰爭開始の當時、任を京城の公使館附武官の補佐官に受け、國
際上きわめて微妙なる關係の下における、朝鮮官民の精神的狀態の一斑を
觀察するの機會を得た。その後、米國の華府に在勤し、朝鮮人の我が國に
對する感情並に獨立運動の動き等をも研究することが出來た。かの朝鮮に
おける『萬歲事件』の發生を、京城におけるよりも早くこれを知り、我が
政府に打電したものは、じつに予である。

爾來、朝鮮問題に多大の興味を持ち、研鑽を怠らなかつたが、近時、内
地にある朝鮮人と接觸する機會を、時々有すると共に、先年、上海事變中、

我が陸、海の最高指揮官等が爆弾を受けたことなどを、軽々に觀過する譯には行かぬ。

本書は、時局が今後ますます重大を加ふべきを稽へ、肇國の精神がますます、宇内に光輝を發揚せんことを思ひ、兩民族が一團となり、我が國の大使命を有効に遂行せんことを希ひ、三千年來の歴史的考察を基礎として、いかにして一體となすべきかを記述したものである。朝鮮人は勿論、朝鮮人と接觸する機會あると否とを問はず、内地人もまたこれを翻き、共に皇運扶翼の道を講ずるを得たならば、予の光榮これに過ぐるものはない時、正に是れ其の時である。敢へて本書を江湖に送る。

昭和辛巳盛夏

著者識す

目次

貴族院議員 關屋貞三郎閣下

- | | |
|-------------|----|
| 一、推薦の文 | |
| 二、自序 | |
| 一、叙説 | 一七 |
| 二、古朝鮮 | 二五 |
| 三、神功皇后の御折衝 | 三一 |
| 四、新羅の統一 | 四三 |
| 五、高麗の興起 | 五三 |
| 六、蒙古の來寇 | 六〇 |
| 七、李成桂の建國 | 六九 |
| 八、豊臣秀吉の大陸經營 | 七三 |

九、明治維新直後の情況…………… 八

一〇、日清戦争…………… 七

一一、日露戦争…………… 五

一二、日韓の合邦…………… 一〇三

一三、合邦後の半島…………… 三

一四、結 言…………… 三六

寫 眞 挿 入

- 一、朝鮮 神宮
- 二、高麗 燒
- 三、慶州 佛國寺
- 四、扶餘の石佛
- 五、京城 市街
- 六、南 棉 北 羊
- 七、地 圖(倍大)

朝鮮半島

陸軍中將 井上 一次 著

一 叙 説

一度び東亞の地圖を披いて観るならば、朝鮮半島が、我が國と亞細亞大陸とを連ぬる連鎖なることを知り得るであらう。この位置は、我が國の大陸進展のために、きわめて重要な價值を提供するものなるともに、もし他のもゝの手に委したならば、我が國防上すこぶる危険なるべきは、疑ふの余地がない。

しかして、我が國とこの半島との關係は、我が神代のころより存在してゐたもので、

一、我が皇祖天照大神の時代において、本州中、朝鮮半島にもつとも近き出雲地方には、すでに住民の大集團が存在してゐた。

二、また、我が國において、もつとも古く編纂せられたる正史の一なる日本書記に、素盞鳴尊が曾戸茂利に赴かれたと記してあるが、この曾戸茂利とは朝鮮語にて牛頭と云ふことで、朝鮮にては尊を、牛頭天皇と稱へ、金剛山と太白山との中間にある牛頭山には、尊を祭つてゐる祠堂がある。これをもつて見ると、素盞鳴尊が朝鮮に往來せられたことは、事實である。

三、なほ、皇紀四百五十四年、すなはち孝元天皇の九年に國を建てた

支那の漢の時代に使用せられたる古鏡等が、現今出雲地方、北九州並に近畿地方に分布せられてゐることをもつて見ると、これ等の鏡は、朝鮮半島を経て我が國に來たもので、彼我の交通がきわめて頻繁であつたことを證するものである。

故に、我が國と朝鮮半島とは、皇祖時代より密接なる關係を有してゐたことは、明白にこれを知ることが出来る。

しかるに、我が肇國以來年を経ること、に三千年、この間における我が國と半島との關係は、複雑をきわめたものであつた。しかし、この半島は三十年前より我が國と合邦をなし、我が崇高なる肇國精神、すなはち艱正、樹徳をもつて、世界の平和、人類の幸福及び進歩に貢獻せんとする、所謂「八紘一宇」の大使命に向ひ、手を携へて邁進せねばならぬことゝな

つた。故に兩民族は心からなる一致をもつて相協力せねばならぬことは論ずるまでもない。

いまや、我が國は、滿洲事變を楔機とし、滿洲と日滿議定書を締結し、もつて存立權を確保し、支那事變により、八紘一字の序幕を開き、目下東亞新秩序建設のために努力中である。しかし蔣介石政權は、いまだ我が國の眞意を了解するにいたらず、依然抵抗を繼續してゐるし、英米は蔣政權及び蘇聯を扶けて日、獨、伊三國の樞軸により、世界の新秩序を建設せんとする行動を妨ぐるに努めてゐる。こゝをもつて、我が日、滿、華親善の基礎の下に大東亞共榮圈を設定せんとする計畫は、今後幾多の困難に遭遇すべきことを豫期せねばならぬと、ますます内部の結束を鞏固ならしむるの必要を痛感する。これがためには朝鮮人は、言ふに及ばず彼等と

觸接する内地人も、兩國民族が三千年來保持せし關係を明かにし、兩民族結合の必要を根本的に知悉し、その目的を達成するに遺憾なからしめねばならぬ。

二 古朝鮮

朝鮮は、皇紀千五百年前ごろ、すなはち支那の堯時代に、檀君なるものが國を建て、ゐたと云ふ傳説があるが明かでない。支那の正史の傳ふるところによると、殷の紂王が、その諸侯の一人なる姫發のため滅ぼされたとき殷の王族の箕子が、人民を率ひて、現今の滿洲より朝鮮半島の北部に掛けて國を建て、都を王險、すなはち現今の平壤に置き、これを朝鮮と稱したことから始まる。この朝鮮なる語は、『東表の日出國』といふ意であつてまことに尊とき言葉である。しかして、箕子が國を建てたときは、我が皇紀前四百六十二年であるから、皇宗神武天皇より四、五代前と推定せら

れあたかも 皇祖天照大神が我が國を肇め玉ひしころであるかと恐察し奉るるのである。

このころ、朝鮮半島の南部は、

一 東方日本海に面したる地方を辰韓と稱へ、

二 南方對馬海峽に面したる地方を辨韓と稱へ、

三 西方黃海に面したる地方を馬韓と稱へ、

たが、これ等の名稱は方位に従ひ稱呼したもので、いづれの地方にも幾多の小部落國家があつたのである。

その後、皇紀四百七十五年、すなはち 孝元天皇の御代の二十九年に、燕人衛滿なるものが、箕子四十一世の孫箕準を逐ふて朝鮮王となつた。このときが支那では漢の高祖の時代である。

しかるに、皇紀五百五十六年、すなはち 開化天皇の御代の四十九年に衛滿の孫衛右渠が勢を恃んで漢の武帝の命を奉ぜなかつたから、その攻撃を受け、翌年滅ぼされてしまつた。仍つて、武帝は眞蕃、樂浪、玄菟、臨屯の四郡を置き直轄地となした。しかして、後漢のときにいたり、樂浪の南に帶方郡を置いた。

一、しかるに、皇紀六百〇四年、すなはち 崇神天皇の御代の四十一年に、辰韓の地に朴赫居世なるものが起つて新羅國を樹て、王となつた。

二、その後、皇紀六百二十四年、すなはち 崇神天皇の御代の六十一年に、滿洲にゐた一民族の長、朱蒙なるものが、朝鮮半島の北部から滿洲にかけて高句麗國を樹て、王となり、漢の所領は無くなつてしまつ

た。

三、このときごろ、新羅國は、辨韓にあつた大加羅國と三己紋の地を争ふた。大加羅國は、皇紀六百二十八年、すなはち 崇神天皇の御代の六十五年に、王子蘇那曷叱智、一名、都怒我阿羅斯等を使臣とし、我が越前國敦賀に上陸せしめ、大和國に入り 天皇に援を求めた。天皇は御聽許になり、皇族鹽乘津彦を差遣せられた。この地方は、次ぎの御代の 垂仁天皇のとき、任那の國號を賜ひ、鹽乘津彦の子孫は、彼の地にあつて統治に任じてゐた。これが我が國の朝鮮に統治をなした始めである。

四、しかるに、皇紀六百四十三年、すなはち 垂仁天皇の御代の十二年に高句麗は始祖朱蒙の子溫祚を馬韓に派遣し。これを占領せしめ、百

濟國を建てた。

故に 垂仁天皇の御代における朝鮮半島は、北部には主として漢民族の移住者よりなる高句麗國があり、南部には主として半島原生民族たる韓民族よりなる新羅、任那、百濟の三國が出来て、その形勢は一變したのである。しかして、このときごろにおける半島の文化程度を、平壤の南岸にあつた樂浪の古墳に據つて見ると、漆器や土器等の漢より傳はりたるものが多く、相當に進歩してゐたことが判る。また、このときごろの精神文化の本旨が支那の堯舜時代と等しく、『與民同樂』と『老少同樂』とであつたことは、とくに銘記すべきことである。なほ、このときごろには、我が國との交通もますます頻繁になつてきたことは、皇紀六百三十四年、すなはち 垂仁天皇の御代の三年に、新羅の王子天日槍が我が國に歸化したこと

さうして御代も推斷することが出来るのである。

三 神功皇后の御折衝

朝鮮半島は、漢の文化を輸入してからこの方、漸次その發展を遂げてゐたが、我が國にては皇紀七百四十二年、すなはち景行天皇の御代の十二年に、九州筑紫の熊襲が叛した。天皇は七年にわたり御親征あらせられたが、三年を経て熊襲がまた叛した。そこで、天皇は、皇子日本武尊をして代はり討たしめられた、尊は一年にて御凱旋遊されその後、約百年にわたり平穩であつたが、皇紀八百五十三年、すなはち仲哀天皇の御代の二年にまたく熊襲が叛した。天皇は、大本營を筑紫の香椎宮に進め給ひ、親ら征せられたけれども、その目的を達するに先だち、天皇は翌三年陣中において崩御遊ばされた。

このとき、仲哀天皇の皇后は、陣中にお在しましたが、皇后の御生母が我が國に歸化したる新羅王子天日槍の子孫でお在しました關係上、熊襲の謀反が新羅の使嗾に出てゝあることを御承知になつてゐたから、その根幹を絶つゝの必要をお認めになり、吉備鴨別をして熊襲を征討せしめたまひ御親らは兵を率ひて新羅との直接折衝の任に就かせられた。

そのときの新羅王は波沙竊錦と稱へ、金城すなはち現今の慶州に都してゐたが、皇軍の一部が上陸するや否や、金銀、絹布百八十艘を獻じて、

『船の腹干さず、棹梶干さず、日西より出て鴨綠江逆さに流るゝとも叛き奉らじ』

との誓ひを立て、服従の意思を明かにした。

皇后は、毎年これだけの貢物を納めしむることを定めしめられ、王を許し

給ふた。高句麗、百濟もこれを聞き、ともに來りて皇化に服した。仍つて、皇后は任那に兵を駐め給ひ、筑紫に御凱旋遊ばされた。この駐兵せしめたまふところは、任那加羅、すなはち現今の慶尙南道の金海であつて、こゝが所謂日本府である。

かくのごとくにして、朝鮮半島の全部は、我が國に服することゝなつたこれ全く皇后の御折衝の賜である。皇后が神のごとき御功績を擧げさせ給ひしことに對し、我が國民は感激措く能はざるものがあつたと、もに後世神功皇后の尊號を奉つた次第である。

しかして、神功皇后が、皇紀九百二十九年に崩御遊ばされたる後も、朝鮮半島は依然我が國と同一の關係の下に立つてゐたが、漸次半島内に動搖を生ずるにいたつたことは、次の通りである。

一、皇紀千〇二十五年、即ち 仁徳天皇の御代の五十三年に、新羅は朝貢せなかつた。我が國は、これを責むるため、田道將軍を遣わされた將軍は苦戦の、ち、わずかに四邑の民を虜にして歸つた。

二、皇紀千百二十三年、即ち 雄略天皇の御代の七年に、任那府の鎮將吉備田狹は 天皇に叛き新羅に通じた。天皇は、田狹の弟、弟君をして兵を率ゐ彼の地に赴かしめこれを攻めしめ給ふた。しかるに、弟君は彼の地に着くや否や、田狹に誘はれ、新羅を討たなかつた。このとき弟君の妻樟姫は、弟君を殺し兵を率ひて歸つてしまひ、巾幗のためおゝひに氣焔を吐き一美談を残した。天皇は、これを聞こし召され、同九年に紀小弓等を遣はし、田狹を征伐せしめ給ふたけれども、功を奏なせかつた。

また、同天皇の御代の二十年に、高句麗は大兵を派遣し、百濟の國都漢城を占領せしめ、盖鹵王を殺した。かくのごとくにして、百濟はほとんど滅亡したにも拘らず、高句麗が我が國を憚つて兵を引揚げたその翌年、我が國は汶洲王を立て、都を熊津すなはち現今の忠清南道公洲に移し、百濟の復興を圖つたけれども、百濟の國勢は次第に衰へてしまつた。

三、皇紀千百七十二年、即ち 繼體天皇の御代の六年に、百濟は任那の地を割讓せんことを我が國に請ふた。當時の鎮將は大連大伴金村であつたが、百濟より賄賂を取りその請を許した。任那は我が國を怨み、その信頼心を拭殺した。

新羅は、この機に乗じて任那を侵した。天皇は、近江毛野をして

六萬の大軍を率ひこれを討たしめやうとせられたが、新羅は、筑紫の國造磐井を謀叛せしめ、毛野の渡航を妨げた。仍つて、天皇は大連物部麁鹿火をして磐井を討たしめ給ひ、毛野は任那に渡ることが出来た。しかし、毛野の任那における二年間の統治が宜しきを失ふてゐたため、任那王は我が國に來りこれを訴へた。朝廷は、毛野に歸朝を命じたけれども、毛野は還つて來なかつた。こゝにおいて、任那は新羅及び百濟の兵を借りて毛野を伐ち、毛野は歸國中死んでしまつた。

四、皇紀千九十七年、即ち宣化天皇の御代の二年に、新羅は任那に入寇した。

五、皇紀千二百〇一年、即ち欽明天皇の御代の二年に、天皇は百濟に詔して任那を回復せしめ給ふた。また、同天皇の御代の九年に、

天皇は百濟を援けて高句麗を伐ち給ひ、漢城及び平壤を占領した。しかし、百濟はこれを守ることが出来ず、新羅に奪はれた。こゝにおいて、新羅と百濟との争となり、百濟の聖明王は新羅軍のために殺されてしまつた。

しかるに、同天皇の御代の二十三年に、新羅は任那を攻撃した。我が政府は百濟と、もに防禦に力を盡くしたが、我が諸將と百濟の諸將との間に意見が一致を欠いたのみならず、任那諸國の中には新羅に合邦することを希望するものも多くなつたから、新羅は任那を占領し、我が日本府を破壊してしまつた。この年は、神功皇后が新羅との折衝に、奏功遊ばされてから三百五十一年目であつて、このときの日本府は、安羅、すなはち現今の慶尙南道咸安に移つてゐたが、まことに遺

憾千萬と謂はねばならぬ。

こゝをもつて、欽明天皇は紀男麿を遣はし、その回復を圖り給ひ我が軍は新羅の兵を破つたけれども、河邊瓊缶が軽々しく進んだゝめついに破れ、その目的を達することが出来なかつた。調伊企儼が捕へられ、新羅王を罵つて殺されたのもこのときである。

欽明天皇は、同天皇の御代の三十二年に崩御遊ばされたが、崩御に臨み任那回復を遺詔あらせられた。

六、皇紀千二百三十二年に、敏達天皇が御即位遊ばされたが、天皇はたゞちに永年百濟に行つてゐた日羅に對し、任那回復の策を御下問遊ばされた。日羅は、國力を培養し軍備を整へ、士氣を振起せしめ、しかるのち罪を問はゞ可ならんと奉答した。しかるに、日羅は百濟に歸

還の途中、百濟のために毒殺されたゝめ、この案は實行を見ずして終つた。

その後、皇紀千二百五十一年、すなはち崇峻天皇の御代の四年にいたり、天皇は任那を回復するため外征の師を起さんことを詔らせられた。しかし、天皇が翌年崩御遊ばされたゝめ、これまた中止となつてしまつた。

しかるに、皇紀千二百六十年、すなはち推古天皇の御代の八年に新羅は任那と戦ふた。仍つて、天皇は來目皇子を遣はし任那を救はんとせられたが、皇子の薨去のためこれも中止せられた。その後、天皇はふたゝび軍を集め出航せしめられんとせられたけれども、新羅王より降服の旨を申し來つたから、軍を途中より還へし、任那も任那

日本府もつひに回復することが出来なかつた。

かくのごとく、我が國の朝鮮半島における據點は、つひに回復することが出来なかつたことは、まことに遺憾至極である。その原因は數多くあつたであらうが、欽明天皇の御代に佛教が入り來つた際、國論が別かれてゐたため、國際問題にまで力を入れることが出来なかつたことが、有力なるもの、一つであつた。國內における結束の必要はこれでも判る。

しかし、神功皇后が新羅と御折衝に御成功遊ばされてからこの方、彼我の交通はますます繁しくなり、支那の文化は半島を経てさかんに我が國に渡來したことは否むことは出来ない。五經博士、醫、曆算博士をはじめとし、衣縫女、木工、鍛冶、陶工、畫工、革工のごときすべてこの時代に來たものである。ことに、我が國に至大なる影響を與へたるものは、佛教と

佛教との傳來である。

一、儒教は、皇紀三百七十二年に高句麗に、皇紀三百七十五年に百濟に皇紀五百〇三年に新羅に傳來したが、我が國への傳來は、皇紀九百四十四年、すなはち應神天皇の御代の十五年に、百濟王が阿直岐をして良馬を獻ぜしめたことから始まる。阿直岐は、よく漢學に通じてゐたから、天皇の皇子稚郎子は彼れに就いて漢學を修められた。天皇は、あるとき阿直岐より百濟の博士王仁のことを聞こし召され、使をもつて王仁を召された。王仁は、漢の高祖の子孫で、祖父のとき百濟に歸化したものである。しかして、王仁が天皇の御代の十六年に來朝したとき、論語十卷と千字文一卷とを獻じた。稚郎子は、王仁に就いても漢學を修められ、造詣ますます深きものがあつた。その後、阿

直岐も王仁も我が國に歸化し、王仁の子孫は河内にゐて西史部、西文首、西文氏といひ、代々我が朝廷の記録を掌つてゐた。

二、佛教も、儒教と等しく皇紀三百七十二年に高句麗へ來り、皇紀三百八十四年に百濟へ傳來し、新羅へは高句麗より皇紀四百十年ごろに移入したのである。しかして、佛教の我が國への傳來は、皇紀千二百十二年、すなはち 欽明天皇の御代の十三年であつて、百濟の聖明王が使をもつて佛像と經典とを獻じたことより始まり、爾來我が國に佛教傳播の端緒を開いたのである。

この兩教が我が國固有の精神文化、すなはち皇道の進展に多大の裨益を與へたことは、いまさらこゝに記述するまでもない。かく考へると吾人は朝鮮半島に對し、ことさら深き親しみを感じざるを得ぬのである。

四 新羅の統一

任那が滅亡したのちの半島は、新羅、百濟及び高句麗三國の對立状態にあつたが、いづれも我が國への朝貢は繼續してゐた。このころの支那は三國時代より隨、唐の時代に移つてゐたが、この間半島も種々の影響を受けつひに百濟、高句麗の兩國は滅亡し、新羅の統一を見るにいたつた。いまその經過の概要を述べれば、次の通りである。

一、高句麗は三國の内、もつとも支那に近かつたから、兩國の交渉は多かつた。しかして、皇紀千二百五十八年、すなはち 推古天皇の御代の六年に、高句麗の嬰王は、遼河以西に入冠した。そのときの支那

は、隨の時代であつたが、文帝は漢王諒をしてこれを迎撃せしめたけれども、糧食が續かず、その上悪疫も發生したため、その目的を達することが出來ず、歸還してしまつた。その後、同天皇の御代の十九年に隨の煬帝はみずから三十萬の兵を率いて高句麗を伐ち、翌年その將宇文述は平壤まで攻め入つた。しかし平壤を陥ることが出來なかつたのみならず、かへつて敗れて歸還してしまつたその翌年、隨はまた高句麗を討ち、そのまた翌年にも煬帝みずから三百萬の兵を率ひてこれを伐たんとした。高句麗王は、これを聞き降を乞ふた。しかし、隨はこれを滅ぼすに先だち、自ら滅びて唐の時代となつた。

唐の太宗も、皇紀千三百〇四年、すなはち皇極天皇の御代の三年に、みずから高句麗を征し、遼東の安市城、すなはち現今の蓋平を攻

めたけれども落ちなかつたから、翌年軍を還した。

二、このときごろの百濟は、義慈王の在位中であつたが、兵を出して新羅を攻め、かつ高句麗と結んで、新羅が唐に朝貢するの道を絶つた。

新羅の太宗武烈王は、援を唐に求めた。仍つて、唐の高宗は、皇紀千三百二十年、すなはち齋明天皇の御代の六年に、蘇定方をして二十萬の兵を率ひ、これを援けしめた。唐軍は新羅の兵と、もに、國都泗泚城、すなはち現今の忠清南道扶餘を陥れ、王以下八十餘人を捕へて唐に伴ひ、百濟は滅びてしまつた。すなはち、百濟は建國以來三十六代六百七十八年間續いたのである。仍つて、唐は劉仁願を駐めて百濟を守らしめた。

三、しかるに、百濟の王族の一人鬼室福信は百濟恢復の師を起こし、援

を我が國に求めて來た。仍つて、皇太子中大兄皇子は、齋明天皇を奉じて九州に赴き、筑紫の朝倉宮にあつて軍を指揮せられた。このとき皇子は我が國に入質として來てゐられた義慈王の弟豐璋に、我が兵五千餘人を附し、百濟に送り還された。豐璋は歸還後百濟王となり、我が國より同行せる多臣蔣敷の妹を王后に冊立せられた。しかるに、その翌年、齋明天皇が崩御遊ばされたから、中大兄皇子は、喪服を纏ひたるまゝ軍國のことを督し給ひ、その翌年水軍百七十艘と兵糧とを準備し、さらにその翌年二萬七千の兵を新羅に派遣せられた。しかるに百濟新王の居城は、唐と新羅聯合軍のために陥れられたのみならず、我が水軍は劉仁軌の率る唐の水軍百七十艘と、白村江口すなはち現今の錦江口にて戦ひ敗れたため、百濟再興の目的はこれを果たすことが

出來なかつた。こゝにおいて、新王は高句麗に走り、王后と王子並に我が軍は、すべて我が國に引揚げまつたく三韓の地と關係を絶つことゝなつた。その際、百濟人中我が國に歸化したものが多數あつたことをもつて見れば、百濟人が我が國を信賴してゐた一斑を知ることが出来る。

百濟滅亡のち、唐の鎮將劉仁願は、使をもつて我が國に物を獻じて來た。仍つて、我が朝廷は、この使者を饗し物を賜ふたけれども、一方には防烽を壹岐、對馬及び筑紫に設け、大堤を筑紫に造る等警戒を怠らなかつた。しかるに、皇紀千三百二十五年にいたり、唐からも我が國に劉德高等を派遣し、好を通じて來たから、我が國もまた好を修むることゝした。

四、唐はしばしば高句麗を伐つたけれども、その目的を達せなかつた。

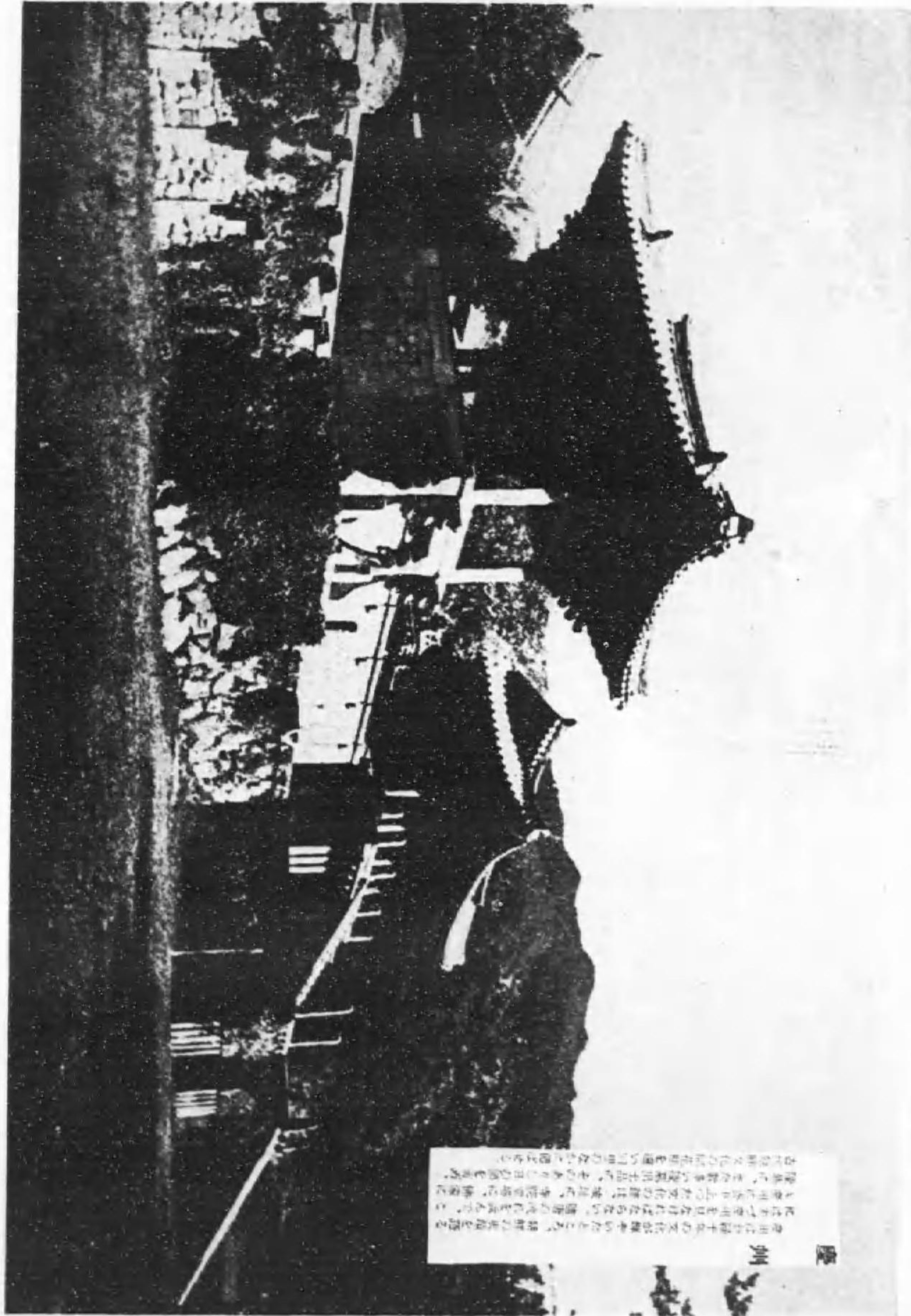
しかるに、高句麗の宰相泉蓋蘇文が死んだとき、その子男生、男建の兄弟が権を争ふた。唐の高宗は、この機に乘じ李世勣を遣はし、新羅及び百濟の鎮將劉仁願とともに高句麗を三方より討つた。これ等の諸隊は、平壤を圍むこと月餘に及び、ついにこれを陥れ、王及びその一族を本國に送り、高句麗を滅した。この時は、皇紀千三百二十八年、すなはち天智天皇の御代の元年にあたり、高句麗は二十八王、七百〇五年間續いた。この際にも、高句麗人の我が國に歸化したものが多かつたのも我が國の徳化の結果であらう。こゝにおいて、唐は安東都護府を平壤に置き、高句麗及び百濟を治めしめた。

五、高句麗の滅亡したるのち、その遺臣中にも恢復を謀つたものがあつ

た。新羅の文武王はこれを助け、百濟の地を略した。唐の高宗はこれを討たんとしたが、新羅は使をもつて罪を謝したから、高宗はこれを赦した。

しかるに、文武王はその後半島にある唐兵を敗り、高句麗を占領してしまつた。このとき、唐はこれを責めなかつた。新羅も唐に従ひ、文武王の子弟を唐に遣はして仕へしめたから、唐は半島を放棄してしまつた。こゝにおいて、文武王は半島の全部を統一することとなり、唐は平壤にあつた都護府を遼東に移した。じつに、皇紀千三百三十七年、即ち天武天皇の御代の七年である。

かくのごとくにして、我が國は全く朝鮮半島と關係を絶つこととなり、半島の全部は新羅王朝の下に統治せらるゝこととなつた。これ、我が國が



慶州
慶州の慶熙宮の正殿の一角を撮影したものである。この宮は、高麗時代の遺蹟で、その建築様式は、朝鮮半島の歴史を物語る貴重な資料である。

内治に急であつて、他を顧るに違がなかつたのと、やゝ文弱に流れてゐた結果に外ならぬと考へる。また、この時代の唐は、その當初にありてはその勢ひ盛んであつたが、女禍の災を受け半島を放棄したことは、半島のためのみならず、我が國のためにも幸であつたと謂はなければならぬ。

五 高麗の興起

新羅が半島を統一してゐた時代は、およそ二百六十年間であつたが、この間、北方には渤海、契丹の兩國が興つた。これ等の二國は、半島よりもかへつて我が國と種々の關係を有してゐた。しかして、新羅はつひに滅亡を見ると、もに、高麗の興起となつたが、いまそれ等の事情を述べると次の通りである。

- 一、新羅が半島を統一してから三十五年の後、すなはち皇紀千三百七十二年 元明天皇の御代の和銅五年に、高句麗の遺民大祚榮なるものが滿洲の東部から朝鮮の北部に掛けて渤海國を建て、唐に屬してゐたから文物もまた大いに開けた、それから十六年後、即ち 聖武天皇の御

代の神龜五年に、渤海國ははじめて使節を我が國に來朝せしめた。この使節の一行は、黒龍江方面より蝦夷地に入つた爲めその大部はこゝにて殺されたが、その一部のみ出羽に到着した。仍つて、我が朝廷は衣服冠履等を送り、京都に召した。渤海國は、これを楔機としてとき／＼我が國に入貢した。

二、しかるに、新羅は半島を統一し、その勢力が加はつて來ると、もに漸次専恣となり、皇紀千三百九十五年、すなはち 聖武天皇の御代の天平七年に、我が國に使を送り、國號を改めて王城と稱する旨の通告を齎さしめた。我が朝廷は、藩屬國の禮でないとして、その使臣を逐ひ歸した。その翌年、我が國より使臣を送つたが、新羅はその辭令が藩屬國に對するものであるとなして、これを却けた。ここに於て我が

政府部内には問罪の師を興さんとする意見もあつたが、新羅の方より來攻せんとするの情報があつたから、筑紫の海岸は勿論、壹岐、對馬の防備を嚴にし、かへつて防守の位置に立つた。かくのごとくにして新羅は我が藩屬の地位より離脱することとなつてしまつた。

その後、皇紀千四百八十四年、即ち 淳和天皇の御即位の年に、新羅征伐を企てられたことがあつたけれども實行せらるるにいたらなかつたのみならず、皇紀千四百九十四年、すなはち 仁明天皇の御即位の年にいたり、我が國は新羅の使者の入國を禁じてしまつたから、その入貢は自然絶えてしまつた。

その後、皇紀千五百五十四年、すなはち 宇多天皇の御代の寛平六年に、新羅は對馬に來冠した。そのときの對馬守文室善友は、武勇が

あつたから、おゝいに新羅の軍を敗り、その三百餘人を捕へ、かつ兵船、武器等を獲て戦勝を博した。

三、しかるに、東部蒙古すなはち現今の滿洲の熱河地方において遊牧をしてゐた契丹なる種族は、唐の末期より漸次勢力を得てきた。しかして、唐が滅びて五代に入りたるときの初めごろ、耶律阿保機なるものがこの地に顯はれ、皇紀千五百七十六年すなはち 醍醐天皇の御代の延喜十六年に自立して帝位に就き臨潢に都した。

四、このときごろより、新羅の内政は大いに亂れ、群雄が割據した。その中にて王建なるもの、勢力がもつとも強く、皇紀千五百七十八年、すなはち 醍醐天皇の御代の延喜十八年に、あらたに高麗國を建て、都を松嶽今の開城に奠めた。しかして、皇紀千五百九十五年、即ち

朱雀天皇の御代の承平五年に新羅を滅した。ここに五十六王、九百九十二年間續いた新羅は遂に滅亡するに至つたのである。

高麗は、建國ののちたびく我が國に入貢を請ふたが、朝廷はその本意を疑ひ許可せられなかつた。

五、契丹の皇帝は、その後各方面を征服し、北は室韋、西は吐蕃、東は渤海に及んだが、渤海國を滅ぼしたのは、皇紀千五百八十七年、すなはち 醍醐天皇の御代の延長五年であつて、渤海國は十四代、二百五十年間續いた譯である。

そののち、契丹の皇帝は漸次南下し、皇紀千五百九十六年、すなはち 朱雀天皇の承平六年に、洛陽を陥れたけれどもこの年に自殺して死んだ。その子太宗は、晋の屬國となることとなし、翌年國號を遼と

改め大梁に都した。この契丹は、朝鮮半島に對しては、別に何んらの影響を與ふることをしなかつたが、それは主として支那方面に力を注いでゐた結果であると思はれる。

六、しかるに、滿洲の北部に住んでゐた女眞族は、皇紀千六百七十九年すなはち、後一條天皇の御代の寛仁三年に、五十餘艘をもつて高麗の海岸を侵し、引續き我が壹岐、對馬に寇し、島民千餘人を殺し、牛馬數百頭を奪ひ、さらに對馬の銀坑をも焼き、進んで筑前に迫つた。

このとき、大宰權師藤原隆家は、盲目同然であつたにも拘らず、老少の所員にまでことごとく武器を持たせ、防禦に任せしめたため、敵は遂に退却し、九州はこれが被害を免るることを得た。

皇紀千七百七十四年、すなはち、鳥羽天皇の御代の永久二年に至り

この女眞族の内より阿骨打なる英雄が起こり叛いた、遼はこれを伐つたけれども却つて大敗した。ここに於て、阿骨打は翌年帝位に就き金と稱した。やがて、その弟太宗の代にいたり、宋と謀つて遼を滅ぼしさらに宋に侵入して國都開封を陥れ、徽宗以下皇族、大臣を北滿に伴ふた。

宋にては徽宗の子高宗が位に即き、都を杭州に遷したが、金と宋とは相戦ひ、たがひに衰へてしまつた。

かくのごとくにして、朝鮮半島の統治は、新羅より高麗に代はつた。この間我が國は、消極的位置に立ち、半島に對し活動せなかつた。一方、北方には、契丹及び女眞族の勃興を見、半島はこれ等の諸國と確執を生じたことはあつたが、大なる影響を受くることなくして経過した。これ契丹及

び女真族が主として力を支那方面に注いでいたからである。

六 蒙古の來寇

支那の宋及び金が衰へたところに、北方黒龍江の一支流たるオノンゲルレン河の上流地方にある蒙古族中より鐵木眞なるものが起こり、諸汗、すなはち諸豪族を征服し、大汗すなはち汗中の汗の位に即き、成吉思汗と稱した。この年は、皇紀千八百六十六年、すなはち 土御門天皇の御代の建永元年である。

このころ、支那の黄河以北は、金の領有に歸し、都を燕京、すなはち現今の北京に建ててゐたが、宋は南遷してわずかに揚子江沿岸を保ち、その

都を杭州に有してゐたに過ぎなかつた。

しかるに、成吉思汗は、金を討つて燕京を陥れ、そのうち中央亞細亞諸國を征服し、その一軍は遠く歐羅巴にまで進攻してゐたが、その攻戰中に成吉思汗は死んでしまつた。

ここにおいて、次の大汗太宗は、皇紀千八百九十三年、すなはち 四條天皇の御代の承仁元年に、宋と約して洛陽を占領し、翌文暦元年に金を滅ぼした。これとともに契丹も亡びてしまつた。

その後、皇紀千九百〇七年、すなはち 後深草天皇の御代の實治元年に定宗は高麗を降したが、さらに憲宗を経て、世祖の忽必烈が位に即いた。この年は、皇紀千九百二十年、すなはち 龜山天皇の御代の文應元年であつて、その領域は東は滿洲、朝鮮より西は地中海にわたつてゐた。

しかるに、皇紀千九百二十八年、すなはち 同天皇の御代の文永五年に蒙古は使者を對馬に派遣し、牒狀を我が國に齎らさしめた。この牒狀には「兵を用ゆるに至つては夫れ孰れか好む所ぞ」と書し、無禮なものであつたから、我が國はこれに答へなかつた。その後文永八年にいたり、忽必烈は都を燕京に進め國號を元と改めた。

越へて三年の文永十一年に、元は忻都の指揮の下に蒙古兵、支那兵を合せ二萬五千と高麗兵八千とを九百艘の船舶に搭乗せしめ、對馬及び壹岐を侵さしめた。元軍は、これ等の地方の人民を虐殺したのみならず、掠奪をも恣にし、かつ進んで博多に上陸し、箱崎祠その他を焼いた。このとき、九州にありし少貳、大友、島津等の諸大名は、馳せ集り防戦に努めたが、たま／＼大風雨が起り、敵船の沈没するもの二百餘艘、死者一萬三千に

達した。

その翌年、後宇多天皇の御代すなはち建治元年に、元はふたたび使を送つた。そのときの執權北條時宗は、これを鎌倉に斬つた。更に四年後に至り 周福等を使節として送つた。我が政府は、これを博多に於て斬り一方博多海岸に石壘を築いて元の再襲に備へた。

これとともに、我が政府は、高麗征討の目的をもつて、九州、中國に戦艦、兵士の調査準備等を行はしめた。しかるに、これを實行するに先だち元は、皇紀千九百四十一年、すなはち 同天皇の御代の弘安四年に、大舉して我が國に來襲した。そのとき、元軍は東路軍及び江南軍の二兵團に分かれて前進して來たが、第一兵團の東路軍は、前と同様忻都の指揮の下に約四萬を算し、その中には高麗兵約一萬があつた。その作戰方法は、前役

のごとく、まづ對馬壹岐を侵し、さらに博多に來攻したのであつたが、博多附近にあつた石壘と我が軍の奮闘に妨げられ、容易に侵入することが出来ず、敵の死傷は相次いで發生した。また、第二兵團の江南軍は、范文虎の指揮の下に十餘萬を算し、寧波より運送船三千五百餘艘をもつて博多に來着したが、その上陸また容易でなかつた。しかるに七月三十日の夜より翌閏七月一日の朝にわたる大風のため、約四千艘の敵船はおほむね破壊し元軍の死者約十萬、高麗軍の死者七千餘に及んだ。

元の再度にわたる入寇は、かくのごとく、いづれも不成功に終つたにも拘はらず、忽必烈は翌々年の弘安六年にも來寇せんとしたが、趙良弼の諫によりこれを中止した。その、ちも、元は我が國の入貢を促して止まなかつたが、皇紀千九百五十九年、すなはち後伏見天皇の正安元年に、元の

僧一寧は國書を齎して我が國に來り、遂に歸化してしまつた。また、越へて二年の正安三年に、元船二百餘艘は、薩摩國甌島の海上に來たけれども風が荒かつた、め、何方にか去つて再び姿を見せなかつた。かくのごとく忽必烈は、來寇の志は容易に己まなかつたけれども、そのころ元は、南方安南の征伐中であつた、め、ついにその宿志を遂ぐることなくして終つた前に述ぶるがごとく、元は、朝鮮半島を含む廣大なる大帝國を建設したけれども、我が國に對する來寇はつひにその目的を達することが出来なかつた。加之、明は太祖以來つねに外征を行ふた、め、その財政が困難となり、重税の賦課や紙幣の濫發を行ひ、國民生活を不安に陥れ、國運は日に傾いていつた。随つて、支那固有の民族なる漢人の不満は漸次昂進し、群雄到るところに蜂起した。しかして、二十年の戰亂の、ち、朱元璋なるも

七 李成桂の建國

我が國においては、皇紀千九百年代より二千百年代にわたる間、すなはち吉野朝より室町時代に掛けては、元寇に對するがごとき舉國一致の行動を採つたこともあるが、その多くは内争時代であつた。これがため、國內の戰敗者は勃々たる雄心を慰むるとともに、その生活の方法を立つるため支那、朝鮮等の沿岸に進出を試みた。

支那にては、我が皇紀二千〇二十八年、すなはち御村上天皇の御代の應安元年に、明は元を滅ぼしたが、明の太祖朱元璋は使を我が國に遣はし支那沿岸に向つてする我が國民の進出を禁ぜんことを求めて來た。そのと

の我が大宰府は、その文辭が無禮であつたため、これを斥けた。明の太祖は、これを憤つたけれども、元寇の失敗に鑑み、來攻することなく、かへつて我が國を『不征國』としてこれを遺詔した。

しかるに、我が國民の進出は依然繼續せられ、四國の伊豫及び九州の肥前地方の大名、小名等は、これ等の進出者に加はり、あまつさへ支那及び朝鮮の浮浪者もまたこれに加はり、その行動は漸次擴大せられ、その人數も數千人の多きに達し、多數の船艦を使用して驚くべき勇猛さを發揮した。かゝる情勢は、高麗にも困却を感じしめ、ことに全羅道にては、これ等の進出者を刺殺せんとしたため、進出者もまた大に怒り、しばしば人民を殺害する等の舉に出た。

時あたかも高麗の將軍李成桂は、これ等の進出者並に参加者を敗つて勢

力を得た。しかるに、この時代の支那は、明が興つた始めてあつたため、高麗にては明黨と非明黨との二派があつて、たがひに軋轢を逞ふしてゐたことにおいて、李成桂は明黨に左膽し非明黨を滅ぼし、自立して王位に即き開城に都し、のち京城に移つた。この王が、すなはち李王家の祖先であつて、この年が、皇紀二千〇五十二年、すなはち後村上天皇の御代の元中九年である。

李成桂は、位に即くや否や、使を明に遣はして國號を定めんことを請ふた。明はこれに朝鮮と命名し、成桂を朝鮮國王に封じた。そのうち、約七十年を経、我國にては將軍義政のとき、朝鮮の使節がはじめて來朝し、爾來兩國の交通、貿易もふたゝび開始せられ、我が國人の彼の地に移住するものも漸次多くなつた。しかして、李王朝第三代の太宗のころには、文化

もおゝいに進み、銅製の活字を鑄造することを創め、世界の文化史上に一新紀元を劃した。

高麗國の滅亡に關し吾人に與へたる教訓は、當時國內に二派があつた、
め、李成桂に利用せられたことである。一致協力の必要に對し、吾人は一層その感を深くせざるを得ぬ。

八 豊臣秀吉の大陸經營

皇紀二千二百四十五年、すなはち 正親町天皇の御代の天正十三年に關白となり、翌十四年に大政大臣となつた豊臣秀吉は、つとに海外を經略せんとするの志を有し、その翌年、すなはち 後陽成天皇の御代の天正十五

年に、薩摩、大隅及び日向を領せる島津義久を征伐中に、使を朝鮮に遣はし、傳ふるに明國征伐に協力せんことをもつてした。

その後、皇紀二千二百五十一年、すなはち 後陽成天皇の御代の天正十九年にいたり、秀吉は國內の統一も全部終つたから、いよゝゝ海外經略に着手せんとし、關白職を養子秀次に譲つて大閤と稱し、ふたゝび使を朝鮮に遣はし、前同様の要求をなした。しかるに朝鮮より答がなかつた。仍つて、秀吉はまづ朝鮮に進出せんと欲し、翌文祿元年みづから肥前の名護屋に赴いて經略の指導に任じ、宇喜多秀家に陸兵十四萬を附し、加藤清正及び小西行長を先鋒として釜山に上陸せしめたが、派遣部隊は沿道の諸城を陥れて京城に迫つた。

このときの朝鮮は、太祖八世の孫宣祖の時代であつたが、王は王妃及び

世子光海君瑄を伴ひ北方に逃れ、義州に駐つて援を明に請ひ、その二王子臨海君及び順和君は、東北地方咸鏡道に逃れた。このとき、京城にゐた市民の大部は逃れてゐたから、我が軍は容易に京城を略取することを得た。そのうち、行長は王を追ふて平壤にいたり、清正は二王子を追ふて咸鏡道に進んだが、會寧府吏鞠景仁は、二王子を捕へて清正に降つた。

また、このときごろの明は、神宗の時代であつたが、まづ祖承訓等をして朝鮮を援けしめた。行長は、平壤にてこの軍を破つた。明廷はおゝいに驚き、一方沈惟敬をして和を求めしめ、一方李如松をして大軍を率ゐ、平壤を攻撃せしめた。この大軍は、たちまち平壤を回復したため、行長は辛うじて京城に歸り、沿道の諸將もまた同地に引揚げた。李如松は勝に乗じて京城に迫つた。京城にあつた我が諸將の中には、京城に籠城せんことを

主張したのもあつたけれども、小早川隆景等に勵まされ、全軍は京城を出で、碧蹄館において大いに明軍を破つた。

かくのごとく、我が陸軍は大勝を得たが、九鬼嘉隆等の率ゆる九千餘人よりなる我が水軍は、朝鮮水軍の將李舜臣のために破られ、北方に前進することが出来なかつた。

碧蹄館の戦は明廷を震駭せしめ、沈惟敬に命じて和議を圖らせた。このとき、我が軍は戦争のため幾分疲労し、その上病兵も多かつたから、秀吉は和議をなすを諾し、名護屋において沈惟敬等と會見し、左の七ヶ條を示した。

- 一、明帝の皇女を日本の后妃となすこと。
- 二、兩國の貿易を再興すること。

- 三、明と日本との兩國大臣はたがいに聖書を交換すること。
- 四、朝鮮八道の中、四道を日本に割譲すること。
- 五、朝鮮皇子と大臣とを人質とすること。
- 六、二王子を返すこと。
- 七、朝鮮は誓書を書くこと。

その後、明廷が我が提示条件を承諾したとの報があつたから、秀吉は釜山に守備兵を留め、その他の諸軍を本國に引揚げてしまひ、國王等は文祿三年十月四日國都京城に歸還せられた。

しかるに、皇紀二千二百五十六年、すなはち後陽成天皇の御代の慶長元年にいたり、沈惟敬は明の國書を携へて來朝した。秀吉は大阪城において沈惟敬を引見した。そのとき、沈惟敬が讀める明の國書には、『爾を封

じて日本國王と爲す』とあるのみにて、我が要求の七ヶ條は一つも載せてなかつた。秀吉はおゝいに怒り使者を逐ひ返し、再征の準備に着手した。

我が再征軍約十四萬は、翌慶長二年に出發して朝鮮に進入した。諸將の部署は、おほむね前の通りであつたが、總指揮官は小早川秀秋が任せられた。このときの戦には、明軍が朝鮮の諸地點を守備してゐたから、陸軍の戦鬪は全羅忠清二道に限られてゐたが、我が水軍はたゞちに敵の水軍を敗つた。このとき加藤清正は蔚山を死守し、おゝいに令名を揚げたけれども戦況は大體に思はしくなかつた。かゝる中に、秀吉は病に罹り、この年の八月に伏見城にて薨去し、遺命して在鮮の兵を引揚げしめた。このとき、敵は我が退路に迫つたけれども、島津義弘は泗川にて、敵の大軍を破つたため、その退却は困難ではなかつた。また、閑山島にて我が水軍を扼して

みた鮮將李舜臣は、我が軍が引揚げし際、明兵を援けて戦闘中戦死し、我が軍は無事引揚げを終了した。

前後七年を費したこの事變は、物質方面においては別に得るところはなかつたが、我が國威を海外に發揚し、國民に進取の氣風を涵養し得たことは、きわめて著しかつた。しかのみならず、このとき陶工等を伴ひ歸つた諸侯が、その領内において製陶業を起さしむる等、文化の發達に貢献したこともまた尠くなかつた。活版が我が國に傳つたのもこの時である。

なほ、この際、とくに述べたきことは、咸鏡道方面に向つた加藤清正が鮮人に與へた感化である。朝鮮の二王子が釜山にて清正に別かるゝに際し清正に與へたる書中に『其の慈悲佛の如し、眞個日本人中の好人なり』と記し清正の待遇に對し深く感謝してゐられるし、また、朝鮮人金宦なるも

のは清正の歸國に際し清正を慕ひて我が國に同行し、清正の薨じたとき殉死せんとして果さず、七週忌に當り、つひにその素志を達したものとさへあつたもし、熊本妙本寺にある清正の墓に詣てたならば、その墓側に金宦の墓のあるを發見さるるであらう。

この事變の朝鮮に與へし影響にいたりては、じつに著大なるものであつて、その疲弊は數十年の後に及ぶも、容易に回復することが出来なかつたといふことである。もし、朝鮮王が秀吉の請に應じ我が國と協力したならば、朝鮮は何等の戦禍も受くることなく、我が國ととも明國に對して戦勝の名譽を完ふし得たであらう。まことに惜しいことをしたものである。この事變の明國に與へた影響にいたつては、まことに甚しくその失費の莫大であつたため、明國衰亡の一原をなした。しかして、明軍は我が軍の引

揚後においても朝鮮に駐屯してゐたが、朝鮮はその亂暴と費用とに苦しみ一日も早く明軍の撤退を望んでゐた。しかも、明がこの事變に要せし戦費は莫大であつたため、明國衰亡の一原因ともなつた。

九 明治維新直後の情況

秀吉が、朝鮮に進入せし以後、我が國と朝鮮との國交は斷絶してしまつた。徳川家康が將軍となつてからのち、これを回復しやうと思ひ、一方には朝鮮に出した際捕へ來つたもの、合計千三百餘名を歸還せしめ、一方には對馬がつねに朝鮮より米を輸入し、その關係が深いことに鑑み、その領主の宗代をしてこれを朝鮮に交渉せしめた。朝鮮國政府もこれに應じ、兩

國の間に通商條約を議定し、貿易船を二十艘と定め、釜山に我が商館を置くことゝなつた。しかして、兩國の貿易は慶長十年より舊のごとく行はれ同十二年には朝鮮の使節を江戸に引見するまでになつた。

その後、徳川家光が將軍職に就きたる際には、朝鮮より慶賀使が來り、爾來それが慣例となり、我が國もまた、朝鮮國王の繼位の際には使節を遣はすことを慣例とした。

しかるに、この慶賀使來朝の際、徳川幕府は國力の強きことを示すため過度の待遇をなし、對馬から江戸に到る沿道の諸大名の負擔する歓迎費はすこぶる多かつた。これに反し、朝鮮政府は我が使節を京城に招かず、釜山にてきわめて簡單なる待遇をなすに過ぎなかつた。仍つて、徳川家宣が將軍となつてゐた時代に、新井白石の建議により從來の諸禮儀を簡略にす

ることに改めた。しかし、徳川吉宗が將軍となつてからのち、萬事復舊主義を採り、朝鮮使節の待遇法もまた元の通りになつた。そのうち徳川家齊が將軍となつた時代にいたり、國家多事の故をもつて朝鮮の慶賀使の來朝を謝絶したために、兩國の交際は斷絶してしまつた。まことに遺憾千萬と謂はねばならぬ。

しかるに、皇紀二千五百二十八年、すなはち明治天皇の御代の明治元年に、我が政府は王政復古とも、その旨を朝鮮政府に告げ、かつ舊交を修めやうとした。

このときの朝鮮國王は、李熙と申す方であつたが、まだ幼少であらせられたので、王の父大院君が攝政となり勢力を振ふてゐられた。大院君は攘夷主義で、平壤その他の地方における基督教徒約二十萬人ばかりを殺害し

たことさへあつた。故に、我が國の明治維新ごろにおける開國進取政策を喜ばれず、我が國書に對し、或は舊來の書式と異なると云ひ、或は對馬の宗氏を介すべしと唱へ、時には我が使節を引見せぬことさへあつた。

こゝに於て我國にては明治六年にいたり、政府部内には西郷隆盛等によりて征韓論が提唱せられ、廟議がほとんどこれに一決せんとしたとき、歐米視察中であつた岩倉具視等が歸朝し、内治の急を説いてこれに反對したため、征韓論は遂に破れ、西郷其他は辭職した。

その後二年、朝鮮の江華島にゐた守備兵が、我が軍艦を砲撃した事件が起こつた。我が政府は、黒田清隆等を遣はし、これを詰問した。その翌年すなはち明治九年の二月に、朝鮮政府はその罪を謝し、かつ通商條約を締結し、釜山の外仁川、元山津を開港することゝなつた。これからのち、朝

鮮政府は西洋諸國との間にも同様の條約を締結し、朝鮮は國際上一獨立國として取扱はるゝやうになつた。

日、鮮兩國が修交條約を締結したところから、朝鮮にては、國王の外戚閔氏が政權を執つてゐた。大院君は意平かならず、明治十五年七月に、兵士を煽動して王宮に亂入せしめ、かつ我が公使館を焼くに至た。こゝに於て我が政府は、花房公使をして、嚴重左の抗議を提出せしめた。

一、償金を出すこと。

二、公使館に護衛兵を置くこと。

しかるに大院君は、我が交渉に應ぜず仍つて、我が公使は歸國せんとした。この形勢を觀取せる清國公使は、大院君をその本國に捕へ去るに至つた。こゝにおいて、朝鮮政府の態度は俄然一變し、我が要求を容るゝこと

ゝなつたのである。明治十五年京城の變と稱するのは、即ちこの事件のことと言ふのであつて、このときより、清國も我が國に倣ひ、兵を京城に置くことゝなつた。

當時、朝鮮には、我が國に親しまんとする獨立黨と、清國に依らうとする事大黨とが出来た。前者は金玉均、朴泳孝等がこれを率ゐ、後者は外戚閔氏の一族がこれを率ひて相對抗した。しかし、獨立黨の勢力は弱かつたから、獨立黨は窮策として明治十七年に兵を擧げて王宮を占領し、かつ大臣を殺し、國王を擁して援を我が公使に求めた。我が竹添公使は、兵をもつて王宮を衛つた。しかるに、清兵二千は、朝鮮兵と連合の下に、事大黨を援けて王宮を圍んで國王を奪ひ、その勢に乗じて、我が公使館を焼き、かつ我が居留民をも殺傷した。

仍つて、我が政府は、井上馨を朝鮮に派遣して談判を開始せしめ、謝罪と賠償とを承諾せしめたが、さらに伊藤博文を天津に遣はし、清國政府の代表李鴻章と會合して、

一、日、清兩國とも朝鮮より兵を引揚ぐることを。

二、今後出兵を要する場合には、互にこれを通告すること。

を約した。これが、所謂天津條約であつて、爾來我が國と清國とは對等の地位に立つこととなつたのである。しかし、朝鮮にては事大黨が政府の要路に立つてゐたため、我が國の朝鮮に於ける勢力は衰へ、金玉均、朴泳孝は我が國に亡命してしまつた。かくのごとく、明治維新後の朝鮮は、我が國と清國との衡争の地であつた。しかし、國際的に朝鮮を獨立國となしたのは、明治九年に我が國が朝鮮國と締結したる條約に胚胎することは

特に銘記すべきことである。

一〇日 清 戰 争

天津條約が成立し、日清兩國は平等の地位に立つことになつたが、清國の朝鮮における勢力は、事實上盛んであつたため、朝鮮政府は我が國に對し侮蔑的態度に出た。いま、その一、二の例を掲ぐると、次の通りである。

一、朝鮮の事大黨は、我が國に來寓してゐた獨立黨の主領金玉均を、上海に誘ひ出だしてこれを殺害し、清國軍艦はその遺骸を朝鮮に搬び朝鮮政府はこれを諸道に梟した。

二、また、朝鮮の官吏は、恣に穀物の輸出を禁ずる防穀令を國內に布き我が國の商人に損害を蒙らしめて顧みなかつた。我が大石公使が嚴談をなし、旗を捲ひて歸らんとするに及び、はじめてその令を撤した。これ等の例をもつて見るも、その一斑を窺ふことが出来る。

これより先き、朝鮮にては、崔福述なるものが、儒、佛、仙の三教を合同して、新東學なるものを唱へたゝめ、刑せられたことがある。しかるにその殘黨は皇紀二千五百五十四年、すなはち明治天皇の御代の明治二十七年五月に、相集つて東學黨を結成し、攘夷論を鼓吹した。朝鮮政府は軍隊を派遣してこれを討伐したが、かへつて破られ、こゝにおいて、朝鮮政府は、救を清國に求めた。清國政府は、これに應ずるとゝもに、同年六月八日兵を牙山に上陸せしめて、我が政府にその趣きを通告して來たこの文、

書は、朝鮮を屬邦と記するなど、不遜を極めたものであつた。

我が政府も公使館及び居留民保護のために出兵し、兵を京城に進むるに至り、東學黨は、これを恐れ解散してしまつた。仍つて、我が政府は、清國政府に對し、兩國協同して朝鮮の内政改革を行はんことを提議した。しかるに、清國はこれに應ぜざりしのみならず、我れに撤兵を求むる一方かへつて兵を増して我が國を威壓しやうとした。次いで我が軍艦が、七月二十五日に、豊島沖において清國軍艦と會したとき、彼れより發砲した。こゝにおいて、我が軍艦は直ちに應戦してこれを撃破し、兩國の戦端はこゝに開け、八月一日左の詔書が渙發せられた。

「天佑ヲ保全シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國皇帝ハ忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス」

朕茲ニ清國ニ對シテ戰ヲ宣ス、朕カ百僚有司ハ宜ク 朕カ意ヲ體シ陸上ニ海面ニ清國ニ對シテ交戰ノ事ニ從ヒ以テ國家ノ目的ヲ達スルニ努力スヘシ 苟モ國際法ニ戾ラサル限り各々權能ニ應シテ一切ノ手段ヲ盡スニ於テ必ス遺漏ナカラムコトヲ期セヨ

惟フニ 朕カ即位以來茲ニ二十有餘年文明ノ化ヲ平和ノ治ニ求メ事ヲ外國ニ構フルノ極メテ不可ナルヲ信シ有司ヲシテ常ニ友邦ノ誼ヲ厚クスルニ努力セシメ幸ニ列國ノ交際ハ年ヲ逐フテ親密ヲ加フ何ソ料ラム清國ノ朝鮮事件ニ於ケル我ニ對シテ著著鄰交ニ戾リ信義ヲ失スルノ擧ニ出テムトハ

朝鮮ハ帝國カ其ノ始メニ啓誘シテ列國ノ伍伴ニ就カシメタル獨立ノ一國タリ、而シテ清國ハ毎ニ自ラ朝鮮ヲ以テ屬邦ト稱シ陰ニ陽ニ其ノ內政ニ

干涉シ其ノ內亂アルニ於イテ口ヲ屬邦ノ拯難ニ籍キ兵ヲ朝鮮ニ出シタリ朕ハ明治十五年ノ條約ニ依リ兵ヲ出シテ變ニ備ヘシメ更ニ朝鮮ヲシテ禍亂ヲ永遠ニ免レ治安ヲ將來ニ保タシメ以テ東洋全局ノ平和ヲ維持セシムト欲シ先ツ清國ニ告クルニ協同事ニ從ハムコトヲ以テシタルニ清國ハ翻テ種種ノ辭柄ヲ設ケ之ヲ拒ミタリ帝國ハ是ニ於テ朝鮮ニ勸ムルニ其ノ批政ヲ釐革シ内ハ治安ノ基ヲ堅クシ外ハ獨立國ノ權義ヲ全クセムコトヲ以テシタルニ朝鮮ハ既ニ之ヲ肯諾シタルニ清國ハ終始陰ニ居テ百方其ノ目的ヲ妨碍シ剩ヘ辭ヲ左右ニ托シ時機ヲ緩ニシ以テ其ノ水陸ノ兵備ヲ整ヘ一旦成ルヲ告クルヤ直ニ其ノ力ヲ以テ其ノ欲望ヲ達セムトシ更ニ大兵ヲ韓土ニ派シ我艦ヲ韓海ニ要撃シ殆ト亡狀ヲ極メタリ則チ清國ノ計圖タル明ニ朝鮮國治安ノ責ヲシテ歸スル所アラサシメ帝國カ率先シテ之ヲ諸

獨立國ノ列ニ伍セシメタル朝鮮ノ地位ハ之ヲ表示スルノ條約ト共ニ之ヲ蒙晦ニ付シ以テ帝國ノ權利利益ヲ損傷シ以テ東洋ノ平和ヲシテ永ク擔保ナカラシムルニ存スルヤ疑フヘカラス熟々其ノ爲ス所ニ就テ深ク其ノ謀計ノ存スル所ヲ揣ルニ實ニ始メヨリ平和ヲ犠牲トシテ其ノ非望ヲ遂ケムトスルモノト謂ハサルヘカラス事既ニ茲ニ至ル 朕平和ト相終始シテ以テ帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚スルニ專ナリト雖亦公ニ戰ヲ宣セサルヲ得サルナリ汝有衆ノ忠實勇武ニ倚賴シ速ニ平和ヲ永遠ニ克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ全クセムコトヲ期ス』

京城にあつた我が軍隊は、まづ牙山にありし清兵を討つてこれを破り、次いで、八月三十日、山縣大將は第一軍司令官に任ぜられ、九月十三日には大本營を廣島に進められ、越へて三月の十六日をもつて、我が陸軍は平

壤を占領し、我が海軍は、翌十七日に優勢なる清國の北洋艦隊を黃海に敗つた。しかして、平壤に向つた陸軍は、その後進んで滿洲に入つたが、ついで第二軍が編成せられ、大山大將、その司令官となり、兩軍は、翌明治二十八年三月九日、共に遼河の左岸にある田庄臺を占領した。別に旅順に向つた一軍は、たゞちにこれを占領し、ついで威海衛を攻撃占領したが黃海の戦のち、威海衛にゐた清國の殘艦もまた降服した。その後、我が軍が北京の攻略を試みんとしたとき、清國は、同年三月末李鴻章を全權として下關に送り、我れに和を請はしめた。このとき、我が國は伊藤博文、陸奥宗光の二人をして談判の衝に當らしめ、

- 一、朝鮮の獨立を認むること。
- 二、遼東半島、臺灣、澎湖島を我が國に割讓すること。

三、償金二億兩を我が國に仕拂ふこと。

四、沙市、重慶、蘇州、杭州を開港すること。

を約したが、朝鮮の獨立を清國に認めしめたのは、日清戦争の結果である。

しかるに、露西亞、獨逸、佛蘭西の三國は、我が遼東半島の領有をもつて、北京を危くし、朝鮮半島の獨立を空ふし、かつ東洋永遠の平和を破るものであるとなし、共に抗議して來たから、我が國は、平和を維持せんとする熱意より、五月十日涙を飲んでこれに應じ、これに對する償金三千萬圓を清國より收めた。これが、所謂『三國干涉』と稱するものであつて露西亞はかねてより威を東洋に振はんとしてゐるに際し、我が國がにわか

に發展せるを嫉みて干涉せんとし、佛國は露國との同盟の關係よりこれに

加はり、獨逸は露國をして東洋の經營に熱中せしめ、歐羅巴西部に力を用ゆるの餘裕なからしめんとし、これまたこれに参加したものである。このとき以來、我が國民の『臥薪賞膽』これに報みんとするの念は國中に漲つた。

一一 日露戦争

日清戦争のため、朝鮮における露國の勢力は一掃されてしまつた。

しかるに、皇紀二千五百五十一年、すなはち明治天皇の御代の明治二十四年以來、露國は西比利鐵道を起工し、銳意極東の經營に向ひ進出したしかして、日清戦争後三國干涉をなせし以來、京城にありし露國公使は、

韓國に對し勢力の扶植に努め、明治二十九年二月十一日には韓國國王及び世子を露國公使館に播遷し、約一ヶ年間滯留の已むなきに至らしめた。幸にも、反露派の努力により、明治三十年二月十二日王宮に歸還せられ、同年八月十六日皇帝の位に即かれ、國號を大韓と改め、その政體を明かにせられた。その後明治三十三年に清國北京附近において、義和團が、外人排斥の目的をもつて起るや、露國は滿洲における鐵道保護の名の下に滿洲に入兵し、全滿洲を占領してしまつた。しかして、義和團事件が終了せし際にも、露國は滿洲を清國に還附しなかつた。仍つて、我が國は露國に對し抗議し、一方明治三十五年に、英吉利と同盟を結び、清、韓兩國の領土保全と日、英兩國の利益の確保とを約し、露國に對抗した。

こゝにおいて露國は、清國と撤兵を約したけれども、これを實行せざる

のみならず、さらに大兵を滿洲に送つて我が國を威壓し、進んで朝鮮の鴨綠江口龍岩浦をも侵し、朝鮮の獨立を危くせんとした。仍つて、我が政府はしばしば露國と交渉を重ねたけれども、露國はすこしもこれに應じなかつた。こゝにおいて、我が政府は明治三十七年二月七日に開戦の議を決し我が船隊は翌八日佐世保を發した。しかして、八日より九日にわたり、仁川沖及び旅順港口において彼我艦隊の衝突があつて、ついに十日をもつて我が國の露國に對する宣戰の詔が渙發せられた。

こゝにおいて、我が第一軍は黒木大將の隸下に屬し、韓國より滿洲に向ひ前進した。しかしてこの際、我が國は伊藤全權を京城に派遣し、外部大臣李址鎔と日韓條約を締結し、韓國は日本軍の作戰に便宜を與ふることゝなつた。

その後、我が海軍は、旅順港口の閉塞を試みることに三回に及び、五月その目的を達したから、我が第三軍は、同月五日奥大將の隷下に遼東半島に上陸し、旅順の背面にある防禦線なる南山を占領したるのち、北方に向ひ前進した。その後、野津大將の率ゆる第四軍は、五月十九日以来、遼東半島の南岸に上陸し、さらに北進軍に加つた。また、乃木大將の指揮する第三軍は、六月六日以来、これまた遼東半島南岸に上陸し、旅順要塞の攻撃に任じた。しかして、六月二十日に滿洲軍總司令部が編成せられ、大山元帥を總司令官に兒玉大將を總參謀長に任命し、北進軍を統率せしむることゝなつた。

八月に入り、我が海軍は露國の浦鹽艦隊を蔚山沖に迎撃しておゝいにこれを破り、我が陸軍は九月には遼陽を攻略し、十月には敵の逆撃を沙河に

破つた。この間、乃木大將は旅順の總攻撃を行ふこと前後三回、ついに十一月に二百三高地を占領し、その結果、港内の展望が自由になつたから、こゝに逃避してゐた敵艦隊を撃沈した。翌、明治三十八年一月敵將ステツセルはつひに旅順を開城したから、乃木軍は北進して滿洲軍に加はり、あらたに編成せられたる川村大將の指揮する鴨綠口軍と、もに、三月十日をもつて、滿洲にある全陸軍は奉天を占領し、敵を鐵嶺に追撃した。

これより先き、歐羅巴波羅的海にありし露國海軍は、東洋に廻航して來たけれども、旅順がすでに陥落してゐたから、浦鹽斯德に入らんとし、同年五月二十七日對馬海峽を通過せる際、東郷大將の率ゆる我が海軍の迎撃を受けて、敵將ロジエストウエンスキー以下捕へられ、その艦隊の大部は撃沈または捕獲せられた。



城 京

此塔の存在して、都心の地味を以て美譽を添えて、明治の皇都を
 雄大な文藝、商業、政治の中心地と、海外の巨港に比し、同じ特長
 をもつて、満蒙を以て、日本の代り、世界の中心地となす事
 を以て、此塔の存在して、都心の地味を以て美譽を添えて、明治の皇都を
 雄大な文藝、商業、政治の中心地と、海外の巨港に比し、同じ特長
 をもつて、満蒙を以て、日本の代り、世界の中心地となす事



奉天の戦とこの海戦との大勝は、兩國の勝敗をほゞ決してしまつたから
 米國大統領ルーズベルトは講和を勧告し、我が小村全權等は、露國のウイ
 ツテ等と米國のポーツマスに會合し、九月五日をもつて、
 一、露國は韓國における日本の優越權を認むること。
 二、樺太南半部を我が國に割讓すること。
 三、旅順、大連の租借權と長春以南の鐵道とを我が國に讓ること。
 を約し、さしもの大戦もこゝに講和が成立するに至つた。
 この條約にて、露國をして韓國における我が國の優越權を認めしむるを
 得たのは日露戦争の結果である。

一二 日韓の合邦

日、露兩國間の講和が明治三十八年に成立したのち、我が國は同年十一月韓國と條約を締結してこれを保護國となし、統監伊藤博文の下に政治の改善等をなさしめた。しかして、韓國皇帝李熙は、翌三十九年七月位を太子李拓に譲られた。

しかし、その後韓國における國情は容易に安定するに至らず、加ふるに明治四十二年十月伊藤博文が露國に赴かんとする途中、哈爾濱において一韓人のために殺されたため、我が國の上下は、これをもつて韓國の責任なりとなし、議論が大いに沸騰した。朝鮮においても、各種の意見が擡頭し

たが、十二月三日にいたり李容九を會長とせる一進會は、京城に大會を開き日韓合邦の議を決し、會長は會員一百万人を代表し韓國皇帝にこれを建議した。

こゝにおいて、我が政府は、東洋の平和と韓國民の幸福増進のため、合邦の有利なるを認め、諸外國に我が意思を明示したるところ、歐米列強も當然の歸結なりとなし、反對を唱ふるものがなかつた。仍つて、翌明治四十三年八月十六日、寺内陸軍大臣兼統監は、韓國皇帝及び韓國總理大臣李完用との間において、合邦條約の調印を了した。その結果韓國皇帝李拓は位を退かれ、御一族は永く王族及び公族として、我が皇族と同一の待遇を受けさせらるゝこととなり、大韓國を改めて朝鮮と稱し、總督を置いてこれを統治することとなつた。こゝに李朝建國以來、二十七代、五百十八年

である。

しかして、同月二十九日、明治天皇は左の勅語を渙發せられた。いま、これを拜誦すると、前後の事情と聖旨のほどを窺ふことが出来る。

『朕東洋ノ平和ヲ永遠ニ維持シ帝國ノ安全ヲ將來ニ保障スルノ必要ナルヲ念ヒ又常ニ韓國力禍亂ノ淵源タルニ顧ミ曩ニ朕ノ政府ヲシテ韓國政府ト協定セシメ韓國ヲ帝國ノ保護ノ下ニ置キ以テ禍源ヲ杜絶シ平和ヲ確保セムコトヲ期セリ』

爾來時ヲ經ルコト四年有餘其ノ間朕ノ政府ハ銳意韓國施政ノ改善ニ努メ其ノ成績亦見ルヘキモノアリト雖韓國ノ現制ハ尙未タ治安ノ保持ヲ完スルニ足ラス疑懼ノ念毎ニ國內ニ充溢シ民其ノ堵ニ安セス公共ノ安寧ヲ維持シ民衆ノ福利ヲ増進セムカ爲ニハ革新ヲ現制ニ加フルノ避ク可カラサ

ルコト瞭然タルニ至レリ。朕ハ韓國皇帝陛下ト與ニ此ノ事態ニ鑑ミ韓國ヲ舉テ日本帝國ニ合シ以テ時勢ノ要求ニ應スルノ已ムヲ得サルモノアルヲ念ヒ茲ニ永久ニ韓國ヲ帝國ニ併合スルコトトナセリ韓國皇帝陛下及ヒ其ノ皇室各員ハ併合ノ後ト雖モ相當ノ優遇ヲ受クヘク民衆ハ直接 朕カ綏撫ノ下ニ立チテ其ノ康福ヲ増進スヘク産業及貿易ハ治平ノ下ニ顯著ナル發達ヲ見ルニ至ルヘシ而シテ東洋ノ平和ハ之ニ依リテ愈々其ノ基礎ヲ鞏固ニスヘキハ 朕ノ信シテ疑ハサル所ナリ 朕ハ特ニ朝鮮總督ヲ置キ之ヲシテ 朕ノ命ヲ承ケテ陸海軍ヲ統率シ諸般ノ政務ヲ總轄セシム百官有司克ク朕ノ意ヲ體シテ事ニ從ヒ施設ノ緩急其ノ宜シキヲ得以テ衆庶ヲシテ永ク治平ノ慶ニ賴ラシムルコトヲ期セヨ』

この詔とともに、天皇は朝鮮に左の大赦及び減税の詔を下し給ふた。

『朕惟フニ統治ノ大權ニ由リ始テ治化ヲ朝鮮ニ施クハ 朕カ蒼黎ヲ綏撫シ赤子ヲ體卹スルノ意ヲ昭示スルヨリ先ナルハナシ乃別ニ定ムル所ニ依リ朝鮮ニ於ケル舊刑所犯ノ罪囚中情狀ノ憫諒スヘキ者ニ對シテ特ニ大赦ヲ行ヒ積年ノ逋租及ビ今年ノ租税ハ之ヲ減免シ以テ 朕カ軫念スル所ヲ知悉セシム』

こゝにおいて兵器をもつて我が國に抵抗したるものを含む千七百人の囚徒は、一律に恩赦の特典に浴し、同年半期の地租五分の一を減ぜられ、とくに従來郡司の負擔に歸せる租税等六百萬圓を減免し、またとくに三千萬圓を韓國貴族その他に頒たれたるのみならず、儒生の授産、教育等に充當することゝなつた。

かくのごとくにして、朝鮮の人心は、こゝにその歸趨忝順の道を教へら

一三 合邦後の半島

明治四十三年に、日韓合邦が實施せられて以來、こゝに三十二年を經過した。この間、半島に總督たりし寺内、長谷川、齋藤、山梨、宇垣の諸大將を経て、現總督南大將に及び、漸次その成果を擧げ、その素質は向上の一途を辿り、いまや我が國における有力なる部分を構成することゝなつたいま、最近の情報に基き、その近況を述べれば次の通りである。

一、朝鮮の面積は約二十二萬方籽であつて、我が國全面積のおゝむね三分の一を占め、その人口は、おゝむね二千二百萬人を算し、我が國全人口の五分の一強である。しかも、その土地は、各種の産業に適し、

その人民は、體格及び智力ともに向上の途を辿り、内地人を凌駕するもの漸次その數を増して來てゐる。故に、朝鮮半島は、その資源及び人的要素において、我が國の有力なる地位を保有してゐるものと言はねばならぬ。

二、施政は、朝鮮總督の管轄統理の下にあるが、住民も漸次半島の政治に參與することとなり、總督の下にある中樞院は一般施政の諮詢機關となり、道には議決機關たる道會を有し、府には意思機關として府會と教育部會とがあり、邑には意思機關たる邑會、面には諮問機關たる面協議會があつて、半島の施政に貢献してゐる。將來人民が政治的能力を充分に有するにいたつたならば、一層その權能、權限を擴張し半島の施政に有力なる貢獻をなすにいたるべきは、信じて疑はぬところ

である。

三、教育は、さる昭和十三年三月四日に發布せられたる朝鮮教育令に基き、普通教育において國語を常用するものと、然らざるものとの區別は撤廢せられ、朝鮮人も内地人と同一法規のもとに教育を受くることとなつた。

しかして、現今半島内にある學校は、京城大學一、專門學校十八、師範學校十、實業學校百〇一、高等女學校五十七、中學校五十三、小學校三千三百七十二、その他であつて、學生の數約百十餘萬に達してゐる。これ等の學生は、いづれも新式の教育制度に則り教育せられてゐるが、なほ舊式の書堂約四千六百八十、就學兒童約十六萬五千人を有してゐることは遺憾である。これ等は、追次改善進歩せらるべく、

昭和二十四年には半島における教育制度を内地同様に完備せしむる豫定である。また、ここに注意すべきは、近年内地の學校に入り高等の教育を受けんとするものが漸次増加することであつて、現今、その數約一萬五千に達してゐる。將來、ますます朝鮮人の素質を向上せしむるであらうと信ずる。なほ、近年國民の總力運動が半島にても、行はれ、臣道實踐、職域奉公の精神を鼓吹してゐるが、その成果はおゝいに見るべきものがある。

四、兵役制度にいたりては、いまだ徵兵令の適用を見てはゐないが、しかし、近年その適用の必要を認むる意見が高まり、まづ、志願兵制度を採用することとなり、さる昭和十三年四月以來、志願兵訓練所を開設したが、その應募者の數は漸次増加し、昭和十五年度において約八

萬四千に達した。しかして、その成績も大に進歩し、目下現役として内地人と伍し北支方面の作戰に任じてゐるが、なにと、遜色なきはまことに悦ぶべき現象である。

五、生産物は、漸次その品種及び數量を増加してゐる。農産物中、米はもつとも重要な地位を占め、その産額も比年増加し、一ヶ年おおむね二千四百萬石に達し、その中一千萬石を輸移出してゐる。故に、平作のときには、我が本土の不足米を大約補充することが出来る。目下十ヶ年計畫として三千萬石に増産計畫中であるから、將來我が人口の増加に伴ふ米の不足を補ふに有力なる資源となるであらう。

大豆は、米に次ぐ重要農産物であつて、一ヶ年の産額四百萬石に達し内百餘萬石を輸、移出してゐる。

棉の一ヶ年の産額は、二億一千餘萬斤であるが、昭和十五年以降五ヶ年計畫をもつて實收量を五億六千七百萬斤の目標の下に増産に努め我が本土の不足を補ふこととしてゐる。

蠶糸業は、近年五百四十八萬餘石に達し、製糸業もこれに伴ひ、生糸の産額は五十六萬貫餘に達して來た。

古來有名であつた人蔘は、年産おむね九十萬斤、價額約二百萬圓であるが、その産地は開城附近に限られてゐるから、將來大なる増加を見ることは困難であらう。

畜産中 古來有名であつた牛は、近年その飼育數百七十餘萬頭に及んでゐるけれども、馬は五萬餘頭、豚は百四十餘萬頭、鶏は六百九十餘萬羽を飼育してゐるに過ぎぬが將來、漸次増加を見るであらう。緬

羊は現今五萬頭に過ぎぬ。しかし、昭和十一年以來増殖計畫に着手し十五ヶ年後に六十五萬頭に増加せんとしてゐるし、なほ半島全部に普及擴大を圖つてゐるから、將來その發展と増加は期して待つべきであるとともに、我が國の被服原料として資するところが尠くないであらう。

六、林野の總面積は、全土の約七割である。從來荒廢を極めてゐたけれども、林野の保護及び植林の奨励に努めたる結果、その面目を一新し、近年年産約一億四千萬圓に達してゐる。將來、一層その産額を増すとともに、我が國の資源の不足を補ふことが出来る。

七、水産物は、合邦以來著大なる進歩をなし、近年漁獲高約一億五千萬圓、製造高一億七千萬圓、合計三億二千萬圓の多額に達してゐる。

八、製鹽業は、現今、島民消費量のおおむね六分の五を生産し、その額は内地のおおむね三分の一、滿洲のおおむね七分の一に過ぎざる安價である。目下自給自足を圖るため折角増産の進行中である。

九、鑛産物の主要なるものは、金、銀、鐵、銅、石炭、タングステン、モリブデン、螢石、雲母、黒鉛等であるが、近年ことに産金事業の獎勵に努めたる結果、その年額の〇〇多きに達してゐる。將來さらにその産額を増すべく豫期せられる。

一〇、工業製品にいたりては、高麗時代に發達を遂げてゐた高麗燒、建造物等は現今衰頹してゐるけれども、近代科學の基礎の下に行はるる紡績、製糖、セメント、硬質陶器、製糸、罐詰等は漸次發達をなし、ことに近年水力電氣事業の經營により、空中窒素固定工業や、金屬精

鍊、製糸事業に及び、大規模の各種工業が勃興の機運に際會し、近年における工産額は一ヶ年十一億四千萬圓の巨額に達してゐる。

一一、交通も漸次發達を遂げてゐるが、朝鮮の國有鐵道の大部は、滿洲と等しく廣軌鐵道であつて、國際連絡の便もある。明治三十九年には釜山、新義州間の縦貫鐵道が開通せられたが、昭和八年には、京城より圖們江にいたる線が全通し、圖們江より新京にいたる京圖線の竣工、羅津港の修築等のため、裏日本一帯との交通線がにわかに發展し、清津、新京間にも直通列車が開通するにいたつた。しかして、最近における鐵道の全線は四千二百九十餘料に達してゐる。

右に述ぶるがごとく、朝鮮半島は合邦後、政治、教育、軍事、經濟いづれの方面においても、顯著なる發展を遂げつつあつて、朝鮮人の幸福増進

は勿論、我が國の國防及び經濟にも、將來ますます貢獻するやう指導開發に努めてゐる。その結果もまたおおいに見るべきものがある故に、兩民族は彼れ是れ相倚り、相俟つて、合邦本來の目的を達すべきことは、一日を緩せにすべからざる急務である。

物的方面がかかる顯著なる發達を遂げつつあるに反し、心的方面にいたつては、その發達はむしろ遅々たるの感を抱かざるを得ない。いまこれを時代の經過に伴ひ掲ぐると、

一、儒教は、もつとも古くより傳來し、かつ李家五百年間國教であつた一にも拘らず、これを尊奉するものは、傳來の當初より所謂、智識階級に限られてゐた。しかして、現今儒教を奉ずる儒生の數はおおむね五十萬を算するが、あまり勢力を發揮してゐない。

二、佛教は高麗朝の末にいたるまでは、大に隆盛を極めたが、一方には弊害も生じたため、李朝にいたり排斥方針をとり抑壓をした結果、著しく荒廢に歸した。しかるに、明治二十九年に、李太王が信教の自由を許し、ついで明治四十四年に宗教的活動を公認してから、大に蘇生するに至つた。しかして、寺院の現在數は、京城にある總本山大古寺の下に、本山三十一、末寺千六百六十六、僧侶六千六百六十二人、信徒十九萬八千二百餘人を算ふるにいたり、近來活動を開始してゐる。朝鮮人の風習中、佛教より來れるものが多いから、その勢力を回復することは、至難で無からうと考へる。

内地人による布教は、天正年間に眞宗大谷派により行はれたが、一時中止した。しかるに明治十年ふたたび同派の開教があり、同十四年

に日蓮宗、同二十八年に眞宗本願寺派、同三十年に浄土宗等相次ぎ、現今八宗に及んでゐる。しかして、現在寺院の数は七百六十七、布教者は八百〇二人、信者は三十三萬四千百餘人で、内鮮人三萬七千五百餘人を算してゐる。また、佛教團體の經營せる社會事業中、學校は専門學校一、中等學校四、初等學校三十三、幼稚園五十六で、隣保救濟事業は合計十四である。

三、基督教は皇紀二千四百四十四年すなはち 光格天皇の天明四年に、李承薫が北京より天主教の書籍を輸入したるに始まり、その後幾多の迫害ありたるに拘らず、漸次傳播した。明治十七年にいたり、米國の宣教師が入鮮し新教を開教して以來、顯著なる發達を遂げ、漸次傳播し、外國人の關係する教派は九派である。また内地人の傳道は明治三

十七年より始まつたが、現今各派を通じ、教會の數五千二百八十九、布教者四千七百六十三人、信者の數は五十萬八千九百餘人で、内地人は六千四百餘と公稱せられてゐるけれども、その數はるかに多數を占めてゐるやうである。しかして、これ等の諸團體は、時局の進展に伴ひ、革新をなすべき氣運にある。

基督教團體の社會事業にいたりては、其の數もつとも多く、學校は、専門學校五、中等學校十一、初等學校三百二十四、幼稚園百九十で隣保救濟事業は病院二十九の外に、孤兒院、養老院、婦人ホーム、育兒ホーム、社會館等がある。

四、神道の朝鮮渡來は、明治二十六年天理教より初まり、そのち金光教、大社教、黒住教等十一派が到來し、現今布教所三百〇五、布教者

六百三十三人、信者九萬八百餘人、その内鮮人の數二萬四百餘人である。

五、神社は、大正四年にこれに關する規則を定め、ついで昭和十一年に神社規則の全面的改正を行ひ、これ等の成規に遵ひ創立せる神社六十二に上り、外に神社を勸請して一般公衆の禮拜に供する小神祠が、六百四ヶ所ある。

朝鮮の總鎮守として 天照大神及び 明治天皇の二柱を奉祠せる朝鮮神宮は、大正十四年京城南山にて鎮座祭を執行せられ、昭和十一年には京城神社を京城に、龍頭山神社を釜山に、ついで昭和十二年に大邱神社を大邱に、平壤神社を平壤に、なほ昭和十四年には扶餘神宮を百濟の舊都扶餘に御創立を仰出され、各社とも朝鮮人の參拜するもの

漸次多きを加へてゐる。

これを要するに、朝鮮人中特種の教に對し信仰を有するものは、全人口のおゝむね十分の一に過ぎぬ。しかして、その信仰力の多少を比較すれば、基督教がその第一位を占め、儒教これに次ぎ、神道はまだ低位にあると謂はねばならぬ。歲月の經過と傳道者の努力とは、今後幾多の變化を見るであらうが、信仰的勢力の消長が、朝鮮人の思想及び感情に大なる影響を與ふべきことは、論を俟たぬ。これと、もに、我が國の國體併に建國の本義に戻らざる範圍において、これが發達を促進する方法を講ずるの必要を認むる。

一四 結 言

朝鮮半島三千年來の歴史を検討すれば、神代以來我が國と密接なる關係を有することは明かなる事實である。しかして、神功皇后時代においては半島を擧げて我が國に朝貢をなし、きわめて深き關係を有してゐたのみならず、大陸文化が朝鮮を経て、我が國に輸入せられたことなどを考へるとことに親しみを感ずる。

しかるにその後、北方よりする壓力のため、動搖を受けたること一再にして止まらなかつた。近代にいたり、我が國はその獨立を完ふするに努めたけれども、國外よりする使噉と内部における衝突とは、ひいて東洋平和の維持に妨げがあるのみならず、朝鮮人の幸福を増進する所以でないとの見地の下に、兩國はこゝに合邦をなし、その禍根を絶つことゝなつたのである。このことは、一方より見れば、上古における日鮮間の關係に還元したとも言へる。

爾來半島における内外の情勢を観るに、政治、教育、軍事、經濟いづれも著しき發達を遂げ、將來ますます光明を認め得べきことは、まことに欣ぶべき現象である。しかのみならず、いまや北方には、我が國と國防併に經濟を共通ならしむべき滿洲國が出来たから、從來この方面より與へられたる壓力は、今後まったく杜絶したから、半島にある住民は、昔日のごとき懸念もなく、堵に安んじてゐることが出来る。

しかるに、世界の動亂はますます彌漫し、いづれの日に終るべきやはこ

れを豫知することが出来ぬ。この際、我が國は肇國の精神、すなはち養正樹徳の根本主義に基き、ますく一致協力國力の増進を謀り、八紘一字の大使命を達成するため勇往邁進し、世界の人類を擧げて、平和を享有し、幸福を増進し、さらに向上進歩を遂げしむるの途を構ぜねばならぬ。故に、朝鮮半島の負ふべき責務は、從來よりも一層重きを加ふることとなつたが、結局つぎの三項目を目標として進まねばならぬと確信する。

一、朝鮮半島は我が國の重要なる地位に鑑み、精神的、物質的兩方面の發展向上に努め、我が國の忠良なる臣民としての資質を完成し、さらに内鮮一體を具現すべきこと。

二、朝鮮が我が國の交通の要路として、將た發展の基地としての樞要性に鑑み、その要素を備ふべきこと。

三、内地、臺灣と相俟ち、國內資源の開發に努め、すみやかに自給自足の達成を期すること。

これがためには、半島の交通施設は勿論、資源の開發を行ひ、我が躍進的行動に對し、有力なる根據地たるの實を擧げねばならぬ。所謂我が國の本土と半島とは、二者一體たるの結果を齎さねばならぬ。現今、下關、釜山間に、海底鐵道の敷設計畫があるのも、かゝる理由に基くのである。

これと、もに、内地人と朝鮮人とは、内鮮融和のごとき昔日の考を放擲し、内鮮一體の時代に到達すべきことが今後の要求である。幸にも、滿洲事變を楔機として、朝鮮人も皇國民たるの自覺を持つにいたり、支那事變に際しては、熾烈なる愛國心を披瀝し、心の底から皇國日本の興隆と東洋平和とのために、寄與せんとする域にまで進まんとしてゐる。これ等の赤

誠は、從軍志願者の數に見るも明かであつて、血書の歎願書を提出したもののさへある。また、近時愛國美談の數も漸次増加し、七十四歳の老面長が死に臨み國旗掲揚塔の下にいたり、東方に向ひ正座し、陛下の萬歳を唱へて從容として逝けるがごとき、あるひは尋常科上級の男女生徒が、小指を切つて白布に日の丸を描き、これを皇軍に贈つて武運長久を祈りしがごときことは、内鮮一體としての精神を如實に物語つてゐる。

しかしながら、二千有餘萬を有する朝鮮人を擧げて、皇國民たるの實を盡くさしむることは、今後なほ幾多の年月に俟たねばならぬ。これが實現方法は形而上の手段方法も元より必要であるけれども、形而下の手段もけつして等閑に附すべからずと言はんよりは、むしろ、より多くの必要を認むる。いま、その手段方法の主要なるものを擧ぐれば、

一、内地人は、一層我が肇國の精神、すなはち養正、樹徳の本義を發揮し、朝鮮人の尊敬と親和とを受くる資質を具備すべきこと。

二、朝鮮人の統治または指導に任ずるものは、朝鮮民族の傳統的精神たる『與民同樂』と『老少同樂』との兩主義をなるべく尊重し、これが實現に努むること。

三、内地人と朝鮮人との間には、差等を設くることなく、一體たるの實を顯はすこと。

四、朝鮮人は、疑惧の念を去り、内地人と同様、一意臣道實踐、職域奉公の赤誠を最高度に昂揚實現し、内鮮一體となり活動すること。
が最も必要である。

ことに、内地に渡來しある朝鮮人、とりわけ、將來朝鮮人の中心的人物

となりその指導者たるべき學生等は、かかる精神をもつとも有効に發揮するのみならず、これを事實の上に表現し、他に範を示すことは、將來兩民族の結合親和の上に、きわめて重要なことを確信するとともに、これが指導に任ずるものは、きわめて着實穩健に、しかも躍進的の活動をなすの必要きわめて大なるを認むる。

もし、我が國が大東亞共榮圈をさらに北方に擴張せんとする場合においては、朝鮮の價値はますます向上し、半島は東亞における重心をも構成するに至ると同時に吾人は内鮮兩民族が、一層その團結力を鞏固にし、ひとり東亞諸民族に對してのみならず、世界全人類のために、おゝいに貢獻するの準備を要するや、言を保たぬ。

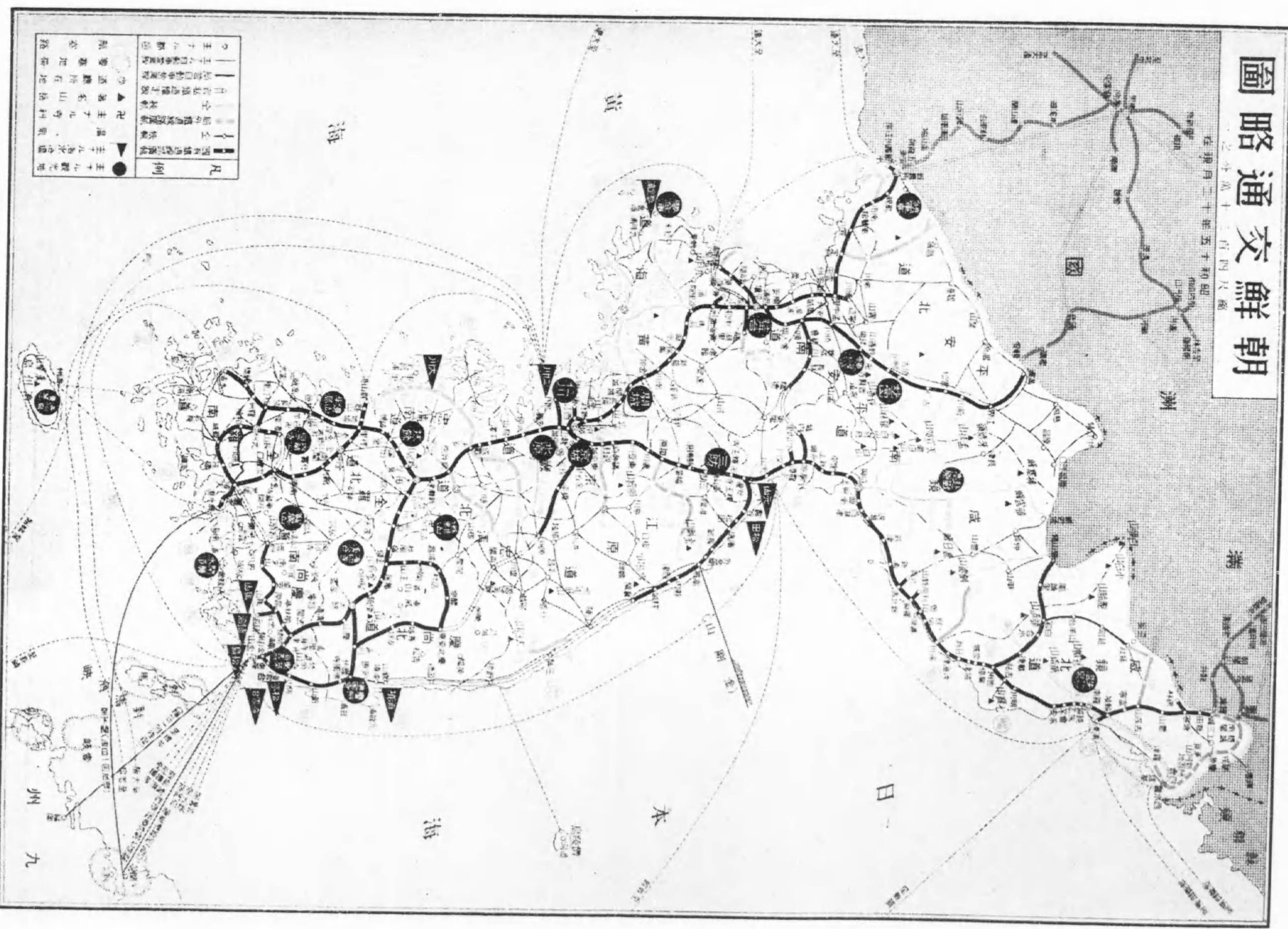
朝鮮半島 (終)

もし我が國が大東亞共榮圈をさらに北方に擴張せんとする場合においては、朝鮮の價値はますます向上し、半島は東亞における重心をも構成するに至ると同時に吾人は内鮮兩民族が、一層その團結力を鞏固にし、ひとり東亞諸民族に對してのみならず、世界全人類のために、おゝいに貢献するの準備を要するや、言を保たぬ。

朝鮮半島 (終)

朝鮮交通略圖

在神戶二十五年五月初版
之寸高十三百四尺縮



日本出版文化協會會員
番號一一一五一一〇番
昭和十六年十月十日印刷
昭和十六年十月十五日發行

版權
所有

朝鮮半島奧付

定價 金八十五錢

送料 金八錢

著者 井上一次

東京市芝區新櫻田町十九

發行所 坂永佳山

印刷所 山縣秀美堂

東京市芝區新櫻田町十九

發行所 山陽社

電話銀座六七八三番
振替東京一五六一六三番

東京市神田區淡路町二ノ九

配給元

日本出版配給株式會社

日本興國同盟編

海軍大將 山本英輔

石原産業會長 石原廣一郎

陸軍中將 井上一次

文部省教育課長 高瀬五郎

内閣情報官 西原龍夫

企畫院調査官 竹本孫一

曉の動員

四・六版二百頁
定價 金七十錢
送料 金八錢

讀め……男も……女も……子供も……

戦争は人間が生存する上に於ては付きものである。人間の歴史は平和と戦争のあざなへる繩である。遂に来るべき日が来た。世界は擧げて戦争動亂の眞只中に置かれた、今や我が國は太平洋の波浪高く實に危急存亡の秋だ。

男も……女も……子供も……擧げて總動員だ……

東芝 京區 資合會 山陽社 振替 東芝
三六一六五一



終